

研究ノート

## 家族システムに関する一つの考察

杉 本 大 輔

星槎道都大学研究紀要

第 4 号

2023 年

## 研究ノート

# 家族システムに関する一つの考察

杉本大輔

### 要約

本研究ノートは、いわゆる家族療法、家族システム論についての既存理論を、筆者が社会学における社会システム論、構造・機能分析を用いて再構築しようとする試みの軌跡であり、その思考過程によりファミリーソーシャルワークにおいて、一つの支援方法の布石を投げようとする試みである。

### 問題意識

ミニューチンによって開発された構造的家族療法では、家族関係をシステムと捉え、そのシステムの弱いところを調べ、それらを強化し、関係をより機能的に変えることを目的としており、その方法は家族関係の在り方に介入し、その関係の問題点を指摘し、家族成員一人一人に働きかけ、あるいはコミュニケーションの場を提供し、あるいは意図的に放置しておいて、その様子を観察する、等の方法を用いて家族関係間のニーズを発見し、それを家族成員が克服できるようにプランニングし、成員のエンパワメントを高める一連の技法を指す。しかしながら、これら一連のプロセスが機能するには、ある前提が必要である、と考える。すなわち「家族成員が一定数以上確保されていること」という前提である。はっきりいえば、G・P・マードックの核家族の概念「一組の夫婦とその子供とによって構成された家族」すなわち、最低3人以上の家族成員が生活する家族、あるいは三世代家族であればこそ機能する、と考える。言い換えれば、従来の家族療法が前提とする家族システムは「最低3人以上の成員が生活する家族」を前提にしているといえる。現代家族の形態は多様化が叫ばれて久しい。特に一人世代、シングルファミリーなどの小規模家族が増加している現状において、それらを包含した新しい家族システム論を構築する必要があると考える。

### 家族システムの再構築試論

従来の家族システム論では「世帯を共有する家族成員の関係性」を、その支援対象としてきたが、これは一定数以上の家族成員数という前提のもとになりたち、さらに各成員の役割が、ある程度固定していることにより成立する。それであればこそ「世帯を共有する成員間」と

いう、狭い範囲での集団としての家族を対象とすることができたといえる。現代家族の形態の多様性を考慮に入れば、これは再考の余地があるといえる。1990年代より問題化してきた児童虐待の多くは、閉ざされた空間内での限定された役割と関係性の中で発生したものが多。ゆえに、家族を限定された空間内での生活を共有する集団、いわゆる家庭という範囲内で捉えるだけではなく、成員一人一人の個人的ネットワークを加えた家族の生活世界を一つの家族システムとして捉えなおす必要があると考える。よって、以下のように定義する。

- ①、家族とは特定の世帯を共有し、家庭を構成する成員関係を基本とする。
- ②、①にさらに家族内の各成員が持つヒューマンネットワーク（この場合はインフォーマル・ネットワーク）を加えて家族システムとする。
- ③、家族内成員関係と家族外成員関係は相互に関連し、特定の家族機能を遂行する。
- ④、家族機能とは、T・パーソンズ「子どもの社会化」「成人のパーソナリティの安定」のように家族内成員間、及び家族外社会において順機能として機能する。
- ⑤、家族機能を遂行する主体は①の家族内成員関係である。よって①を家族構造と定義する。
- ⑥、家族構造は家族システム内での様々な関係性を駆使し家族機能の遂行に努める。
- ⑦、家族構造は家族機能を遂行できなくなった時に家族変動を起こす。
- ⑧、したがって、家族を支援の対象とした場合、支援者は家族変動を防ぐ、あるいは家族成員に対する変動の影響を最小限に食い止めるために、家族構造の機能遂行を支援し、家族システム内の調整、あるいは新たなヒューマンネットワークの構築を視野に入れた家族システムの構築を模索しなければならない。

## 家族機能と家族役割

機能の遂行には、成員が集団内での特定の地位をもち、それに伴い役割を自覚することが前提となる。しかしながら、家族成員関係の形態を特定することが、家族形態が多様化した現代においては危険であると同様に、特定の地位に限定した役割を付与することもまた危険であると考えられる。これは例えば「父親だからこうしなければならない」という思考が「父親だからこれだけやっていたらいい」という思考に変換され、それによって他の成員の役割過多を助長し、最終的に家族変動につながる、と考えるからである。したがって、家族成員間の地位と役割、少なくとも役割については、ある程度、流動的なものとして規定しなければならないと考える。これは、近代家族に見られた性別役割分業のような固定した役割関係により、特定の成員の負担が増加することを防ぐ狙いもあるが、各成員の役割の流動性を持たせることにより、家族システムにおける家族構造外のネットワークとの協働が可能になり、より広い選択肢を持った役割遂行が可能になると考えるゆえである。各成員がいかなる役割を遂行するかは家族構造が置かれた状況によって変化するが、ここで考慮されなければならないのが家族構造内でのコミュニケーションの多少である。と、同時に、家族構造を外部から客観視し、家族構造内の成員に的確なアドバイスを与えることができる構造外の成員、すなわち家族システム内の成員の存在である。これにより家族構造内成員は時々に応じた自身の役割遂行を認識でき、さらには、場合によっては、役割遂行を家族構造外、すなわち家族システム内に役割遂行を一時的に外注化する余地が生まれる。これは、家族形態の多様化における小規模家族形態における役割遂行のセーフティネット機能を家族システムが担うこととなる。また、家族構造内における役割の流動化は、家族システムにおける潜在的機能を誘発する。すなわち、家族構造の成員関係の客観的観察である。旧来の家族システム論において、家族問題が起る原因の多くは「家族の集団としての閉鎖性」と「成員間の距離感の喪失」であった。例えば、一組の夫婦と、その子供からなる家族が夫の転勤により、知人のいない土地に移り住んだとする、夫は新しい赴任地で多忙を極め、妻は友人も作らず子どもとの生活を送っていたが、知らず知らずのうちに子どもとの距離感が狂い、自覚せぬままに子どもに不適切な接し方をし、たまたま遊びに来た旧友に指摘されるまで、自分の子どもに対する不自然な接し方に気づかなかった、という例は枚挙にいとまがない。家族を家族構造だけに限定することなく、その成員の持つヒューマンネットワークを含めた家族システムとして最高得する必要性の二つ目が、このシステムの

持つ潜在的機能の重要性を考慮してのことである。

## ファミリーソーシャルワークの支援範囲についての試論

ジェネリック・ソーシャルワークにおいては、クライアントの支援範囲を、マイクロ・メゾ・マクロと規定している。筆者はこれに異論をはさむ気は毛頭ないが、被支援者をクライアント個人に限定することについては、考慮の余地があると考えられる。従来のソーシャルワークにおいては、家族関係もインフォーマル資源として、支援プランに導入されてきた。しかしながら、これまで繰り返してきたように、現代の家族形態の多様化、特に、小規模家族、クライアントがその成員であったとしたら、その成員はインフォーマル資源としてだけではなく、支援の対象となりはしないだろうか。家族成員数が少ないのであれば、家族システムを構成する家族構造外成員の数もおおのずと減少していることは容易に想像がつく。ゆえに、クライアントの支援を考えると同時に、家族構造内成員の支援を考慮に入れた家族システムの再構築も、考慮に入れる必要があると考える。以下は、筆者がクライアントの家族システムまでを支援対象にした場合に考えうる、ジェネリックソーシャルワークにファミリーソーシャルワークを導入した支援範囲についての一考である。

### ①ミクロ

家族構造を支援対象とする。家族構造内成員へのアセスメントにより、ニーズを発見し、一連のソーシャルワークの技法を用いて支援を行う。

### ②メゾ

家族システムを支援対象とする。家族構造外のヒューマンネットワークをアセスメントし、家族構造内成員との関係調整、あるいは家族システムにおけるヒューマンネットワークが極めて少ない、あるいは、まったくない場合はこれに代替するヒューマンネットワークを構築する。

### ③エクソ

家族システム外の地域社会などへの働きかけ、家族構造が居住する地域社会のける当該事例に関係するフォーマル機関への働きかけ、フォーマル資源の構築。

### ④マクロ

社会全体に影響を及ぼす制度（法制度、行政システムなど）に対する働きかけ。

### ⑤クロノ

時間軸を考慮した支援。家族構造内成員のライフステージを考慮した支援。

以上はあくまで筆者の一考であるが、クライアントの生活空間を考えた場合、その家族構造の大小、成員の多少と属性の違いはクライアントの生活に大きな影響を及ぼす。ゆえに、クライアントの家族システムを考慮に入れたソーシャルワークシステムの構築が急務とであると考える。

## 最後に

家族形態の多様性については1990年代より家族社会学においての大きな検証課題であった。これについては様々な研究者が多様性についての論考をあげているが、筆者はここに、ソーシャルワークという変数を組み込むことにより、多様化した家族形態に暮らすクライアントに対する支援を考慮に入れた家族システムの構築が急務であると考え、考察を繰り返してきた。今回は非常にラフスケッチではあるが、その考察の一端を研究ノートとして発表した。言うまでもないことであるが、システム論、構造・機能分析の視点から見ても筆者の論考は極めて稚拙であり、今後、さらなる考察を続けていく所存である。

## 引用・参考文献

- ・橋爪大三郎 副島隆彦「小室直樹の学問と思想」ビジネス社 2022年
- ・小室直樹「危機の構造 日本社会崩壊のモデル」ダイヤモンド社 1982年
- ・小室直樹「論理の方法 社会科学のためのモデル」東洋経済新報社 2003年
- ・木戸功「概念としての家族 家族社会学のニッチと構築主義」新泉社 2010年
- ・清水新二編「家族問題—危機と存続—」ミネルヴァ書房 2000年
- ・野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編「いま家族に何が起きているのか—家族社会学のパラダイム転換をめぐって—」ミネルヴァ書房 1996年
- ・落合恵美子「近代家族とフェミニズム」勁草書房 1989年
- ・落合恵美子「21世紀家族へ」有斐閣 1997年
- ・目黒依子「個人化する家族」勁草書房 1987年
- ・森岡清美「家族周期論」培風館 1973年
- ・野々山久也・清水浩明編「家族社会学の分析視角」ミネルヴァ書房 2001年
- ・牟田和恵「戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性—」新曜社 1996年
- ・落合恵美子「近代家族の曲がり角」角川書店 2000年
- ・山田昌弘「近代家族の行方」新曜社 1994年
- ・上野千鶴子「近代家族の成立と終焉」岩波書店 1994年
- ・岡村重夫・黒川昭登「家族福祉論」ミネルヴァ書房 1971年
- ・野々山久也編「家族福祉の視点—多様化するライフスタイルを生きる—」ミネルヴァ書房 1992年
- ・森岡清美「家族変動論」ミネルヴァ書房 1993年
- ・山田昌弘「迷走する家族；戦後家族モデルの形成と解体」有斐閣 2005年
- ・山田昌弘「少子化社会日本：もう一つの格差の行方」岩波書店 2007年
- ・山野則子「子ども虐待を防ぐ市町村ネットワークとソーシャルワーク—グラウンテッド・セオリー・アプローチによるマネジメント実践理論の構築」明石書店 2009年
- ・松田茂樹「何が育児を支えるのか—中庸なネットワークの強さ—」勁草書房 2008年
- ・大谷信介「現代都市住民のパーソナルネットワーク—北米都市理論の日本的解釈」ミネルヴァ書房 1995年
- ・前田正子「子育てしやすい社会—保育・家庭・職場をめぐる育児支援策」ミネルヴァ書房 2004年
- ・宮台真司 熊坂賢次 公文俊平 井庭崇「社会システム理論 不透明な社会を捉える知の技法」慶應義塾大学出版会 2011年
- ・T・パーソンズ「社会的行為の構造」全5巻 野上毅・厚東洋輔ほか訳 木鐸社 1974-89年
- ・T・パーソンズ「社会体系論」佐藤勉訳 青木書店 1974年
- ・T・パーソンズ「社会構造とパーソナリティ」武田良三監訳 新泉社 1985年
- ・T・パーソンズ R・ベールズ「核家族と子どもの社会化」橋爪貞雄他訳 黎明書房 1981年
- ・N・ルーマン「社会システム理論」上下 佐藤勉監訳 恒星社厚生閣 1992~95年
- ・N・ルーマン「目的概念とシステム合理性」馬場靖雄 上村隆弘訳 勁草書房 1990年
- ・N・ルーマン「法と社会システム」土方昭監訳 新泉社 1983年
- ・N・ルーマン「社会システムのメタ理論」土方昭監訳 新泉社 1984年
- ・N・ルーマン「社会システムと時間軸」土方昭監訳 新泉社 1986年

# One Argument Considered with Family System Theory for Social Work

SUGIMOTO Daisuke

## Abstract

In this paper, I will introduce the trajectory of reconstructing the existing family system theory using social system theory and structure-function analysis in sociology, and an idea for the construction of support methods in social work.